第 2 回コロナ禍の子ども支援者
地域円卓会議

コロナ禍で子どもたちの権利を長期間制限したことの課題を確認し、
緊急時に必要な子どもをめぐる官民連携のありかたを考える。

実施報告書

開催日時：　2021 年 4 月 7 日（水）18:30-21:10
開催場所：　浦添市てだこホール市民交流室
開催方法：　浦添市てだこホール市民交流室でのリアル開催とオンライン開催（zoom）

主　　催：　公益財団法人みらいファンド沖縄
協　　力：　NPO 法人まちなか研究所わくわく

報告書作成
公益財団法人みらいファンド沖縄
NPO 法人まちなか研究所わくわく

【報告】第 2 回コロナ禍の子ども支援者地域円卓会議

■開催日時：2021 年 4 月 7 日（水）18:30-21:10
■開催場所：浦添市てだこホール市民交流室
■着席者数：7 名（論点提供者、司会、記録者含む）
■参加者数：26 名（NPO・市民団体、福祉・医療機関等）
■主　　催：公益財団法人みらいファンド沖縄
■協　　力：NPO 法人まちなか研究所わくわく
■お問合せ：NPO 法人まちなか研究所わくわく

論点提供

コロナ禍で子どもたちの権利を長期間制限したことの課題を確認し、緊急時に必要な子どもをめぐる官民連携のありかたを考える。

公益財団法人みらいファンド沖縄では、休眠預金を活用したコロナ禍における緊急支援助成の事業を 2020 年 11 月から約半年間実施しています。現場で活動する「実行団体」6 団体中 5 団体が、児童館、学童、子ども食堂、子どもの居場所などで子どもたちと身近に接する活動をしています。これらの団体から、コロナ禍において子どもたちに何が起こったか、子どもたちの自由はどこまで制限されたかなど、現場からの報告に耳を傾け、そこから学ぶべきこと、改善にむけての方法はないか、一緒に模索したいと思います。第 1 回を 3 月 24 日に実施し、本会議は第 2 回となります。

センターメンバー

鶴田　厚子
公益財団法人
みらいファンド沖縄

島村　聡
沖縄大学 人文学部
福祉文化学科 教授

松本　大進
NPO 法人サポート
センターゆめさき
理事長

垣花　道朗
NPO 法人沖縄県学童・
保育支援センター 理事

中村　圭介
那覇市議会
議員

➢ 地域円卓会議の動画記録

・公開日：2021 年 4 月 20 日

・URL：https://youtu.be/UprqZH1gvmc

・公開日：2021 年 4 月 22 日

・URL：https://youtu.be/KlxPVp7_uJA

➢ 今後のアプローチの方向性（提案）

1） NPO 支援を行う団体は、NPO との対等な関係を保ちつつ、双方の対話を通して NPO の立ち向かう社会課題をどう捉えているか、そしてそこに NPO の主体性があるかを確認共有した上で支援すべき。同時に NPO の現状に合わせた適切な支援の規模も意識すべき。

2） 支援団体は、NPO に対して伴走しながら、密な対話によりその事業を評価し、状況の変化による事業変更も柔軟に対応する。そのためには、当該社会課題に対する冷徹な理解が必要で、資金の出し手にも主体性が求められる。

3） 支援者同士もしくは、支援される NPO 同士の得意分野を生かした連携も大切。ネットワークによって課題解決のスピードを上げていこう。

4） 支援団体は、組織の基盤強化、人材育成は必須の活動として含め、そのための資金も確保すべき。

5） 支援団体は、事業公募の段階から、応募しようとする団体とは、可能な限り個別の相談会を行い、それぞれの団体の長期的ビジョンやミッション、中長期的戦略、強み・弱点などを客観化、言語化するためのファシリテーター的な役割を果たすことができれば、当該事業の計画・資金計画立案から実行に至るプロセスの共有のための基礎が築かれ、伴走者としての信頼を得ることができるだけではなく、課題解決の質も向上する。

6） 支援団体は、自らの要求、説明責任遂行のための業務を洗い出し、押し付けではなく、実行団体に対する業務の要求が妥当なものであるか、どの程度の業務量・人手・時間がかかるものであるかを見直し、実行団体が現場における活動により多くの時間とエネルギーが割けるように配慮する。

7） コロナ禍のような緊急時の必要資金をどのように地域で準備するか。この 1 年の経験を踏まえて、シミュレーションを行い、ルール作りを行うべき。この場合も資金の出し手同士のネットワークは効果的だと考えている。

■参加者によるサブセッション

コロナ禍で子どもたちの権利を長期間制限したことの課題を確認し、
緊急時に必要な子どもをめぐる官民連携のありかたを考える。

（参加者記載の原文、発表内容を記載している為、事実と異なることがあります。グループ毎に①、②…と記載）

① ・子どものことだから世論が起きないのではないか？例えば御飯が困っているとき、ご飯を届けてくれる人たちが出てきた。遊びが出来ないときにどう助けたらよいか分からない。世論はお大人が作っている。子どもの思いは議論化しない。子どもの思いを 100%取り上げていない。従属物。家計は生活が先、子どもは真ん中に置かれていない。海外では子供のことを先に考える。日本ではそうではない。遅れている。

・子どもの社会資源が少ない。待機児童に対しての補助ないが高齢者はある。役所も子ども分野に力・人を割かない。日本は子どもに対して声を出さない？

・校則、子どもたちが主体的に変えていく案件。波及していけばよい。やっとここまできたか。中二で校則を変えたという経験がある。そのプロセスが大切なんだなと思う。自分の成長の糧になっている。自由度が高いと難しいがそんな経験させたい。

・自己決定の前に表明が出来るようにしたい。12 条子どもの権利条約について議論したい。

② ・一時的には公園でも集えない状況になったかと思っていたが、コロナ禍でかえって普段だと居なかった人たち（子どもだけの場合も、家族単位の場合も）も公園に出てくるような変化も見えた。

・沖縄の中でも都心部の那覇市と周辺都市や離島によっても考え方の違いなどで外への出やすさ出にくさも違うのかもしれない。もしくは見えている景色（生活圏がちがうのかも）。

・学童に来ることができる子は、まだ「来れる状況」だけれど、そこに来れない子どもや家庭が余計に不可視化されている課題はある。

・官民連携といったときに、その最適な連携のサイズは？
大きな組織同士をつなぐことは難しい。時間もお金もかかる。（行政の部署単位で大きな非営利組織と結びつけるなど。）
スモールステップでつなげる行政の部署で関心を持ってくださる職員さんと民間の個人として関心の有る方をつなげられる仕組みがもっとあると良いのでは？
➡ひらなかさんの場合、那覇市民協働大学院のクラスの受講生とつながって活動をしている

③ ・親が自分のことで精いっぱいで子どもに対してのケアができなかったところが大きくあるのではないか

・子どもの権利を守るために色々考えなければいけないことがあるが、親自身に焦点を当てて、ケアができれば、より子どもに対していい環境、保証につながるのではないか

④ ・この場でつながったことがよかった

・子どもの権利、大人の権利も含めて、もっと知りたい、難しい

・子どもの権利条約を入り口にして、権利についての学習をしていく

・私たちが経験している活動とつなぐ、対話を継続することが重要

・音楽も遊びと同様に不要不急と片付けられがちだが、実はトラウマの改善など様々

な効果があるので、そのことを忘れずにいたい

⑤ ・コロナによって、さまざまな実態があきらかになった

・これから先、再び緊急事態宣言があった場合、コロナ禍が長引いた場合、緊急事態時の対策、過ぎた後の問題がわかったところで、どのように解決するか。今日のような場が役立つ

・対応している支援者のネットワークがつながることによって、この地域でどの方がリーダーにふさわしいか、肌感覚でわかっていく

・例えば行政とつながるときに、リーダーがいれば、いい方向に進むことができるのではないか

⑥ ・官民連携

・日頃活動するなかで団体が行政の話を聞きに行く事を遠慮していたかもしれない

・困りごとを届けようとしたか

・何があったか情報を出す。交通整理する

・行政、民間それぞれ得意なことがあるから連携できるといい

・民間がやるとなかなか権限が出なくて厳しい

・行政が全部やることも難しい

・お互いに立場を理解するために模索し続けることが大事

・Afterコロナ

・メンタルの話が出て、行政も民間もお互いに先のことに時間を割くことが大事ではないか

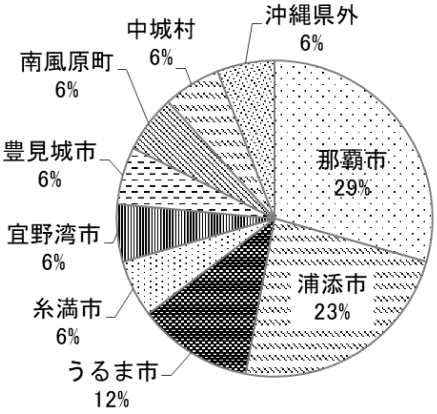
・このような場が大事

第２回コロナ禍の子ども支援者地域円卓会議
参加者アンケート集計

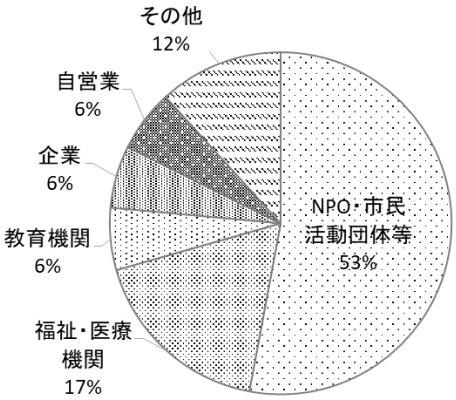
◆概要

・開催日時：　2021 年 4 月 7 日（水）18:30-21:10
・開催場所：　浦添市てだこホール市民交流室
・開催方法：　浦添市てだこホール市民交流室でのリアル開催とオンライン開催（Zoom）
・着席者：7 名（司会、記録者含む）
・参加者：26 名（アンケート回収 17 名、回収率 65%）

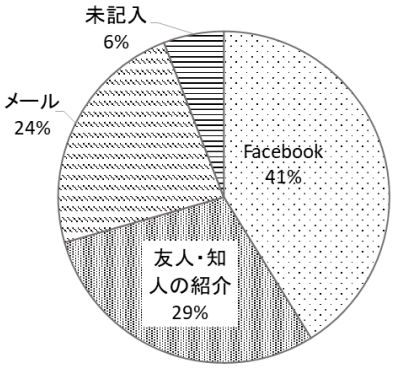
１．どちらから？



２．所属



３．円卓会議はどのように知ったか



４．満足度

平均：4.6（5 点中）

5. 満足	4. 概ね満足	3. 普通	2. あまり満足してない	1. 不満足
11 名	6 名	0 名	0 名	0 名

５．満足度の理由

（5. 満足）

・　多様な関係者がみてきていることがまとめて整理できた。
・　各者の視点がしっかりとしていた
・　良い事例をいくつも聴くことができました。また、今後の課題も見つけることができました
・　所属組織として行政や学術機関への働きかけとしてどのようなことが求められているのかの輪郭も感じ取れました。
・　内容が濃かったです。
・　内容が深く、インパクト大でした！
・　前回の内容をふまえて整理ができたので。
・　グループワークがある会合に苦手意識がありましたが、楽しかったです。
・　多様な方との意見交換よかったです

（4. 概ね満足）

・　とても素敵な会議でしたが個人的な理由で視聴のみとなり皆様とディスカッションが出来ず残念でした。これからも宜しくお願いします。
・　どんどん継続開催、掘り下げて欲しいです。
・　たくさんのワードが出たが、テーマが広くて少し頭に入りにくかったので…。
・　話し合う内容が大きく、自身の考えがそこに至っていないと思いました。お話しを聞く分には学びがありました。有難うございました。

・　新しい視点で、物事を捉えることができました。半分は、理解できた気がします。

６．円卓会議で印象に残ったこと

・　コロナ禍における子どもの遊び。子どもの権利をどう理解し支えるか。トラウマと、その解消について。第４波と言われる今。今までの取り組みでは出来なかった支援や子どもの為の問題についての提示と登録。それを民間から行政、世論への取り組みの大切さなど沢山の学びがありました。
・　開示・共有・評価を面倒くさがらずに大きな単位から小さな単位でもやっていくことが大切だと思いました。
・　情報開示→情報整理（協議の場）→民間参画→アウトカム
・　世論にいかに子どもについて考えてもらうか
・　遊びの再定義、遊びの温故知新でしょうか
・　コロナ禍で人数制限があることで子どもひとりひとりへの対応はかえって最適化された側面もあるというお話、もっともでありながら改めて印象的でした。行政にもアウトカムを追ってもらえる風土や仕組みを醸成する仕掛けづくりの必要性を痛感しました。
・　浦添市の一部地域で、学童、児童館等、さまざまな機関で情報共有できることが凄いと感じました。
・　一人一人の子どもが「自己表明」できる社会にする（なる）ための啓発活動。
・　教育と福祉の情報の一元化はやっと！！とうれしくなり、「世論」は大人が作っている」「行政の話をきくことに遠慮した団体」というのは、確かにと思いました。
・　アカデミックの視点/アウトカム/質の評価
・　浦添の五者会議の話、その場を役所が設けている事は大切だと思います。
・　官民連携における評価について、評価しにくい事業は官（県や市町村）がやればいいのに。その方が早く進むのでは？と思うものもある。←グチみたいな内容ですみません
・　″・子どもの権利、大人の権利意識
・　・先進事例の情報整理と一元化
・　・浦添の５者連携会議″
・　子どもの大変さを想像して、日頃、議論しているけど、今の経験が、先のトラウマになることを気づかされました。
・　情報開示と情報整備と共有

＜会場の様子＞

＜板書記録＞

コロナ禍の子ども支援者 地域円卓会議

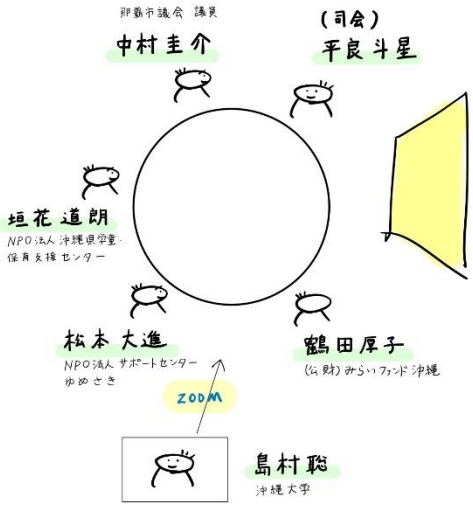
第2回

地域の困りごとを社会課題として、共有・共感する場

2021.4.7 (水)
18:30～21:10
@浦添市てだこホール 市民交流室 ＋zoom配信

テーマ
コロナ禍で子どもたちの権利を長期間制限したことの課題を確認し、緊急時に必要な子どもをめぐる官民連携のあり方を考える。

主催　公益財団法人 みらいファンド沖縄
協力　NPO法人まちなか研究所わくわく



2021.4.7 宣道 1

第1回 地域円卓会議のふりかえり

■ 実行団体と報告者

- 1万人井戸端会議　代表理事　南信乃介氏
- おきなわジュニア科学クラブ代表理事　宮城薫氏
- 沖縄青少年自立援助センターちゅらゆい事業推進部長　今木ともこ氏
- 一般社団法人琉球フィルハーモニック事務局長　上原玲子氏
- 沖縄県学童・保育支援センター　山崎新氏
（那覇市国場児童館館長／事業の実行委員）

■着席者

- 島村聡氏（沖縄大学人文学部福祉文化学科准教授）
- 中村圭介氏（那覇市議会議員）
- 新垣綾子氏（沖縄タイムス記者）

大人の心配（大丈夫かな～？）

- ゲーム依存！
- 生活のリズムが崩れた！
- 昼夜逆転
- 体力低下
- 家庭の負担が過剰

良かったこともあったよ！

- 家族団らんの時間が増えた
- ストレスがなく楽だった（学校がストレスだった子）
- 保護者と支援者が連絡が取れるようになった
- オンラインだったので授業に参加できた

子どもたちの声（いろいろ大変！）

- 宿題が多すぎて疲れる！
- やり遂げられない！
- 学校に戻りたくない！
- 生活のリズムが崩れた！
- 感染者が増えるのが怖い
- 外に出たい、遊びたい！
- 外に出るのが怖い！

支援者が見たこと・感じたこと(1)

- コロナで奪われたのではなく、もともと奪われていた！
  ⇒好きな友だちと好きなように遊べる放課後
  ⇒家庭の団欒
  ⇒家庭教育の欠如（学校に頼りすぎ）
- 保護者のメンタルダウンが子どもに影響した
- 遊びの権利が奪われ、子どもたちは我慢を強いられた
  ⇒成長の機会が奪われる

支援者が見たこと・感じたこと(2)

- 不登校が増えた！
- うつ状態がひどくなった。
- ネット環境のない家庭の子どもが孤立
- DVが重篤化
- つながりのない家庭の子どもの姿が益々見えなくなった
- 複合的な困難にある子どもの状況の悪化
  （例：障害とネグレクト）

支援者が見る課題と対策（1）

支援者支援（能力強化とネットワーキング）

- 正解がない中で判断しなければならない現場のスタッフの能力向上
- 組織の基盤強化が必須
- 現場をもつものの間の繋がりと支え合い
- 包括的に子ども（ゼロ歳から18歳）のことを議論して発信する場所が必要
- 組織化されていないネットワークをどう支えるか。
- 子どもを支える大人が繋がり、子どもが安心して遊べる環境を作る

支援者が見る課題と対策（2）

子どもの権利の保障

- 子どもの遊びの保障
- 子どもが大人の事情で振り回されている。子どもの側から見直す必要がある。
- 子どもの権利を守るための仕組み（社会制度）がない。コロナはその必要性をあぶりだした。何が問題なの？どうやって守るの？この際、その議論を巻き起こすところから始める。
- 行政との住み分けにより、行政の支援を手厚くする必要がある。

支援者が見る課題と対策（3）

直接支援と保護者支援：

- オンラインを利用した支援
- 大人の働き方、職場の環境整備

2021.4.7 宣道 2

松本大進さん

ソラエ　0〜39才
困りごとうけとめる　子ども若者支援
不登校 / ニートひきこもり
お母さんからの相談多い
メンタルヘルスの支え

子どもの権利保障

制限が長期間

（米国小児科学会）

遊びの定義

役割
- 体をつくる
- 人間関係の絆
- 情緒の絆の発達
- レジリエンスを育む（健康で柔軟な心の強さ）
- 脳の発達
- 教育との相乗効果

失敗しても再チャレンジできる柳のような心

あそび時間・休む時間ないと下がっていく

あそびを通したこどものいやし

心の世界 ⇔ 外の世界

中間にあるのが「あそび」

安全・安心が前で　新しい体験

そもそもあそべなかった友だちと会う時間外出の

社会性の発達のそがり

ネットを通じたつながり

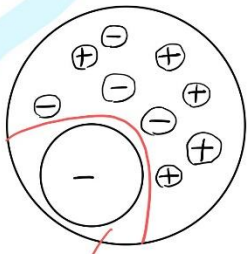
1年続く中家族のキワの差は大きい

小さい子ほど影響大きい乳幼児

あそびは心が自分で回復する力を応援する

あそびは⊕を強める

トラウマ



処理されず残っちゃう

安心・安全

⊖を表現できる

↳回復させることにつながる

2021.4.7 宮通 3

島村聡先生

沖縄大学

- 子どもたちがこの影響を残してしまわないか
- きずをひきずることがこわい
- その対策とられていない
- 公の役割
- 今、行政はワクチンのことでいっぱい目が向かない
- 誰が守るのか、人をおいて、対策を
- 行政だけにおしつけてもムリ
- 我々は何ができるかの議論を。

垣花道朗さん

NPO法人沖縄県学童・保育支援センター

2020年5月 放課後児童クラブ調査

学習のイヨク低下
生活リズム乱れ

- 個々のクラブ、市町村によって状況ことなった
- 人数減、少人数となったことですごしやすいという面も

最低基準は本当に最低だった

小学生にあった基準なのか。

今の基準ではていねいな支援がムズかしい

教育や福祉を子どもが受けるための環境基準のみなおしも

2021.4.7 宮通 4

◎ 子どもの権利条約
↑
大人もこどもも 理解すすんでいない

意見表明の権利 ← 大人は耳を傾けているか

こどもの権理尊重されていない

30% こども ←→ 18.3% 大人

◎ あそびの変化

スマホ/ゲーム/TV への依存

◎ 保ゴ者 → こどもとすごす時間できた
ようやく預けることできた
↓
家庭の差が大きい

せまい家の中で、公園も使えない
その中で…

2021.4.7 宮通 5

中村圭介さん

現場でおきていることが行政に伝っていない
伝っていても、対応はできていなかった

◎ 子どもと大人が対話
子どもと学校の対話) なかった

◎「子ども」も一括りにできない

◎ 個別の対応が求められる — ハコをあける・しめるだけでなく

◎ 民間として、自治会・まち協
↳ 立ち止まろう → 意志決定できなくなった
緊急事態に対して

◎ 新たなプレーヤーもみえてきた

「食べられない子どもたち」が伝っての動き

「あそびが制限された子どもたち」をどう伝えるか

サブセッション

ひらなか・ささはら
公園 よだん使っていない人もでてきていた
都市部 属性のちがい
官民 ー 個人と個人のつながりもあるとよい

とかしき・うえはら・しまむら
こどものこと ゆう先順位ひくい
世論 みかたにつけないと学校うごけない
↳ 大人がつくっている
子どもの意見をうけとめる土じょうまだ

2021.4.7 宮通 6

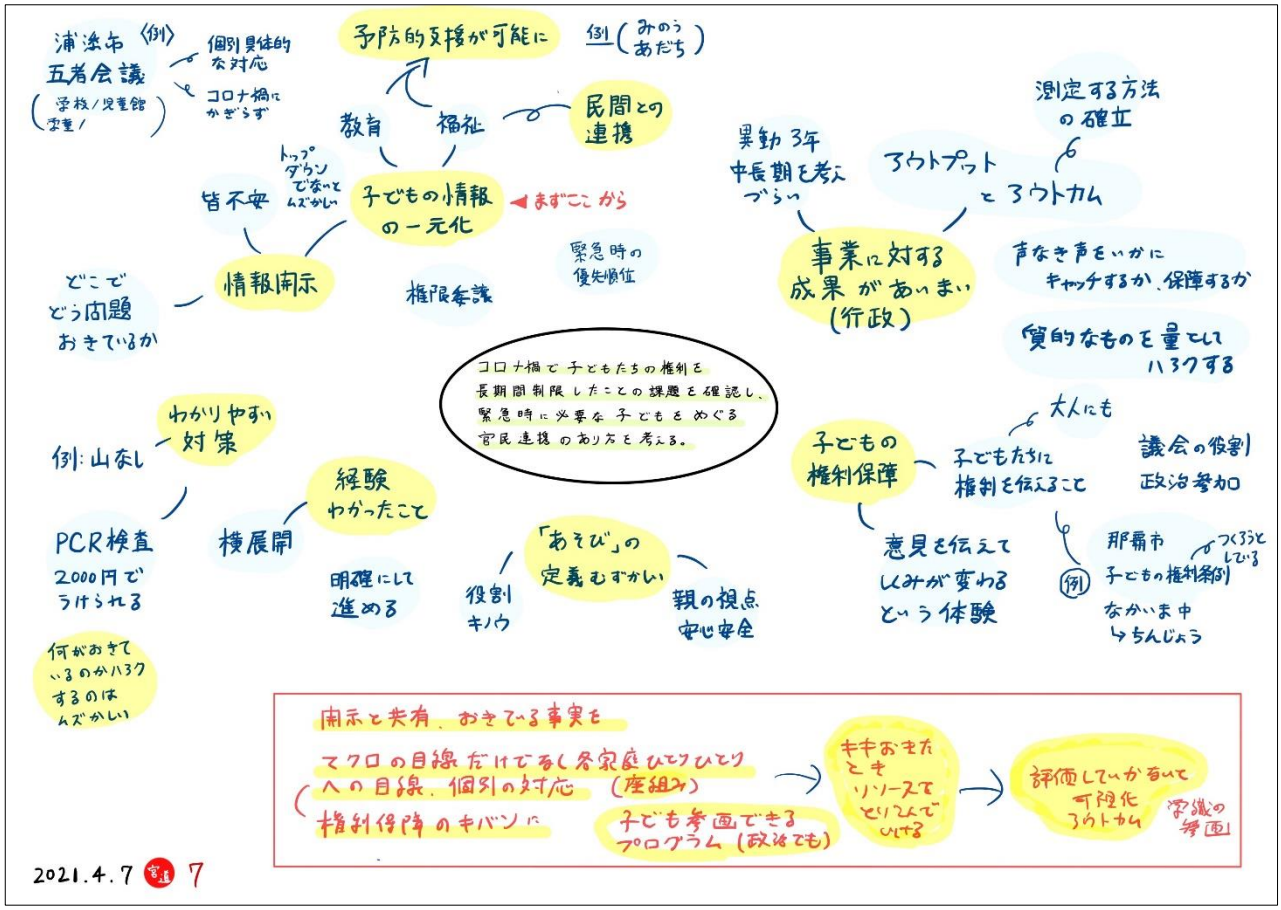
◎
親がせいいっぱいで子どものケアしきれない
親も安心できないと

◎ うえはら・いは・つるた
つながったことよかった
子どもの権利を知りたい
条約を入口にして学ぶ、活動にむすびつける
音楽もあそびと同じく様々な効果ある

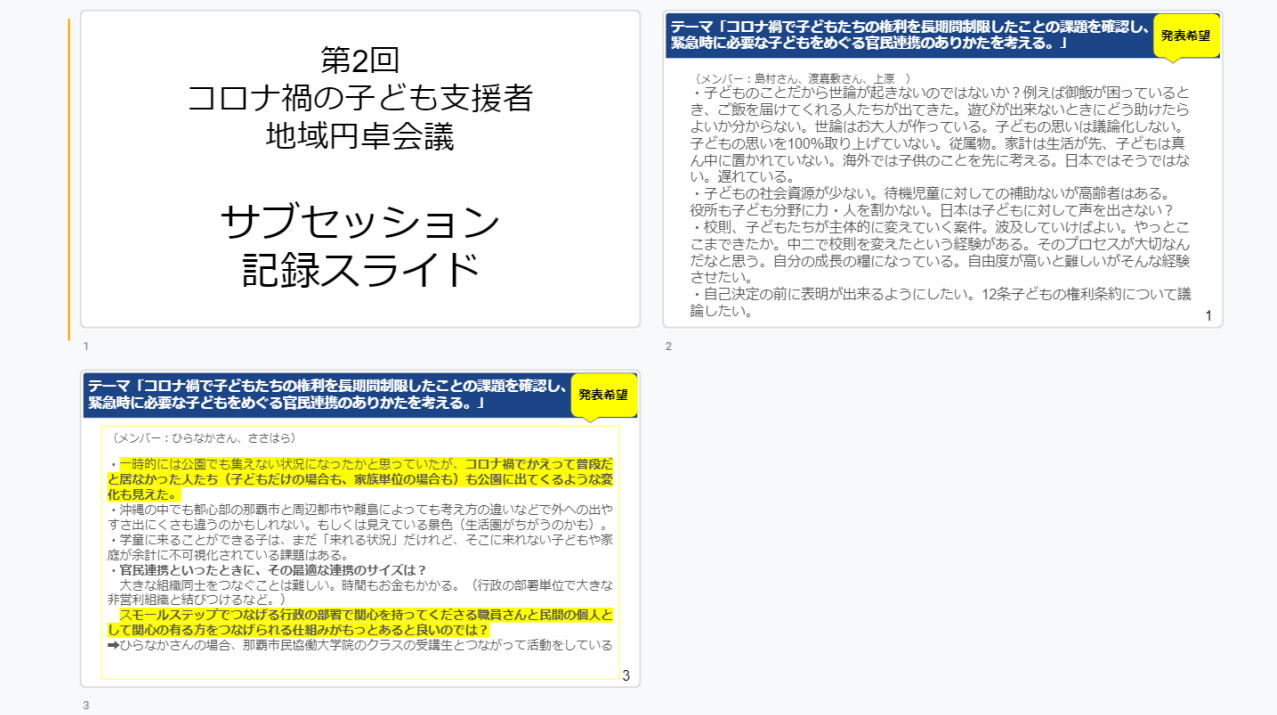
◎
今後のこと、長引いたとき、緊急事態のとき
支援者のネットワーク、今日のような場

◎ にのみや なかむら いは
官民連けい
アフターコロナ
団体が行政に話をすること えんりょ
課題伝えただろうか、「権限」
このような場大事

校則を自分たちで決める
ひとつのきっかけに
こどもがこどものことを決める社会へ



＜サブセッション記録＞



第2回
コロナ禍の子ども支援者
地域円卓会議

サブセッション
記録スライド

1

テーマ「コロナ禍で子どもたちの権利を長期間制限したことの課題を確認し、緊急時に必要な子どもをめぐる官民連携のありかたを考える。」 発表希望

（メンバー：島村さん、渡嘉敷さん、上原　）

・子どものことだから世論が起きないのではないか？例えば御飯が困っているとき、ご飯を届けてくれる人たちが出てきた。遊びが出来ないときにどう助けたらよいか分からない。世論はお大人が作っている。子どもの思いは議論化しない。子どもの思いを100%取り上げていない。従属物。家計は生活が先、子どもは真ん中に置かれていない。海外では子供のことを先に考える。日本ではそうではない。遅れている。
・子どもの社会資源が少ない。待機児童に対しての補助ないが高齢者はある。役所も子ども分野に力・人を割かない。日本は子どもに対して声を出さない？
・校則、子どもたちが主体的に変えていく案件。波及していけばよい。やっとここまできたか。中二で校則を変えたという経験がある。そのプロセスが大切なんだなと思う。自分の成長の糧になっている。自由度が高いと難しいがそんな経験させたい。
・自己決定の前に表明が出来るようにしたい。12条子どもの権利条約について議論したい。

1

2

テーマ「コロナ禍で子どもたちの権利を長期間制限したことの課題を確認し、緊急時に必要な子どもをめぐる官民連携のありかたを考える。」 発表希望

（メンバー：ひらなかさん、ささはら）

・一時的には公園でも集えない状況になったかと思っていたが、コロナ禍でかえって普段だと居なかった人たち（子どもだけの場合も、家族単位の場合も）も公園に出てくるような変化も見えた。
・沖縄の中でも都心部の那覇市と周辺都市や離島によっても考え方の違いなどで外への出やすさ出にくさも違うのかもしれない。もしくは見えている景色（生活圏がちがうのかも）。
・学童に来ることができる子は、まだ「来れる状況」だけれど、そこに来れない子どもや家庭が余計に不可視化されている課題はある。
・**官民連携といったときに、その最適な連携のサイズは？**
　大きな組織同士をつなぐことは難しい。時間もお金もかかる。（行政の部署単位で大きな非営利組織と結びつけるなど。）
　スモールステップでつなげる行政の部署で関心を持ってくださる職員さんと民間の個人として関心の有る方をつなげられる仕組みがもっとあると良いのでは？
➡ひらなかさんの場合、那覇市民協働大学院のクラスの受講生とつながって活動をしている

3

3